

# 因果関係を表す複文における焦点の表現形式について

## ——日中対照の立場から——

新田 小雨子

### 1. はじめに

いままでの研究では、日中両言語の因果関係を表す接続表現の対応関係や使用範囲、機能などに着目して対照分析を行ってきた。本稿は両言語の異同について広範囲に論じず、因果関係を表す複文における焦点の表現形式のみに注目し、検討を行う。

日中両言語においては、焦点 (focus) に関する研究はそれぞれなされてきたが、ほとんど単文に限ったものであり、複文における焦点の表現形式に関する対照研究はあまり実施されていない。ここで筆者は対照研究の一環として、因果関係を表す複文における焦点の表現形式や焦点マーカ―の位置などについて対照分析を試みたいと思う。

中国語は形態的標示に乏しい言語であるため、因果関係を表す複文における焦点の表現形式は語彙によるものが多く、焦点マーカ―の位置はあまり固定されていない。一方、日本語は形態言語であるため、因果関係を表す複文における焦点の表現形式は主に構文形式であり、焦点マーカ―の位置は固定されているのが特徴である。本稿では、実例を通して、両者の特徴を観察し、検討を加えた上、両者の重なりとずれを見出すことを目的とする。

### 2. 焦点の定義<sup>(1)</sup>

焦点に関しては、様々に定義されているため、一言で焦点の定義を定めることは非常に難しい。

Halliday (1967) は、「焦点は新情報を反映する」と主張している。Rooth (1985) は「焦点があれば、必ず選択がある。ひとつを選択し、他を排除した場合は焦点となる」と述べている。田窪(1987)では、焦点の位置について

述べる際に、「文は、前提部分（旧情報）と焦点部分（新情報）とに大きくわけることができることは、よく知られている」と言及されている。この論文においては、田窪は焦点の定義について詳しく述べていないが、焦点は新情報であることを主張している。野田（1997）ではスコープの「の（だ）」について論じる際に、「否定のスコープ」と「否定のフォーカス」を取り上げ、検討を行っている。野田は「否定などの作用が及ぶ範囲をスコープ、その作用を集中的に受ける部分をフォーカス」としている。野田（1997）では主に否定文を中心に記述したが、肯定の平叙文や質問文の場合も同様であることを指摘している。

一方、中国では、焦点についての考えは様々であるが、焦点は新情報であり、排他的であるというような解釈が一般的である。

本稿では、先行研究を踏まえ、焦点について、次のいずれかに該当するものとして定義する。

- ①新情報であるもの
- ②排他的であるもの
- ③文中で、ある作用を集中的に受ける部分（際立てられた部分）

### 3. 焦点の分類および表現形式

#### 3.1 焦点の分類<sup>(2)</sup>

焦点は大まかに「無標焦点」と「有標焦点」の2種類に分けられる。因果関係を表す複文においては、前者が極めて多い。

- (1) こんどは烈しくつき当たったので、杏子は二三歩よろめいた。 『あ』  
这次撞得很猛，杏子翘起了两三步。 《情》
- (2) てんで鍵が、廻らんです。廻らんので、裏から鑿とるんですわ 『山』  
“锁根本转不动，正因为转不动，才想从背面砸开它呢！” 《山》

(注：波線は焦点を示し、二重下線は焦点を提示するマーカーを示す。)

(1)の原文には焦点を提示するマーカーが使用されていない。このような場合、焦点は自然に主節に当てており、「無標焦点」となる。(2)は原文の文

末に「んです」が用いられることによって、焦点は従属節に移ることになる。原文に対して、訳文では焦点のマーカ―が“正”と“才”の2箇所提示されている。これらは「有標焦点」となる。

### 3.2 焦点の表現形式

表現形式に関しては、主に以下の3種類に分けられる。

#### ①音声によるもの

会話の中で、焦点をストレス、イントネーションによって、表現する方法である。同じ会話でも、ストレスやイントネーションが異なれば、焦点の位置も異なってくる。

#### ②語彙によるもの

焦点が語彙によって際立たせられた表現方法である。中国語の中で多く使用されている。たとえば、例(2)の中国語訳文での焦点マーカ―の“正”と“才”がそれである。

#### ③構文手段によるもの

構文形式によって焦点を表す方法である。日本語にも中国語にも使用される。たとえば、日本語の「～から～のだ」構文と中国語の「是…的」構文がそれである。

本稿においては、「有標焦点」に関する分析は②と③を中心として進める。

## 4. 研究範囲および方法

本稿では、原因と理由を表す複文を研究対象とする。現段階で、採集データは「から、ので、て」を含むものに限っているが、日本語の因果関係を表す複文の中でより多く使われる表現であるため、ある程度の客観性も出せるのではないと思う。また、「～のは～からだ」という構文形式も研究対象としたい。「～のは～からだ」という構文形式に関しては、多くの先行研究では、分裂文として扱われているが、本稿では複文として扱う。

研究方法としては、日中対訳コーパスおよび筆者作成データベースを観察し、両言語の因果関係を表す複文における焦点の表現形式の異同を明確にす

る。これまでの研究では、接続表現の対応関係の分析が中心であったが、本稿では、接続表現の対応関係には言及せず、焦点の表現形式に注目する。取り上げる用例には、会話文と地の文の両方があるが、一様に扱うこととする。

## 5. 焦点についての対照分析

3.1で言及したように、両言語の因果関係を表す複文では、それぞれ「無標焦点」と「有標焦点」の2種類が観察される。以下、実例を通して、両言語の対応実態について検討してみる。

### 5.1 「無標焦点」について

- (3) 先方で挨拶をしたから、おれも挨拶をした。 『坊』  
因为他们先打了招呼，我也寒暄了几句。 《哥①》
- (4) 疲れていたのでよく眠った。 『あ』  
因为累了，睡得很香。 《情》
- (5) 外国生地を専門に売っている店が日比谷のHビルの二階にあるので、そこへ出かけるつもりだったが、 『布』  
日比谷H大厦二楼有一家专门出售外国布料的商店，准备到那里看看。  
《棉》
- (6) 心細くて、涙が出そうになった。 『斜』  
我有点泄气和不安，眼泪都快掉下来了， 《斜》

(3)～(6)の用例には、日本語でも中国語でも、焦点を提示するマーカーが使用されていない。これらの文の情報は「旧→新」という順序になっているので、焦点が自然に主節に置かれている。このような焦点は「自然焦点」<sup>(3)</sup>と呼ばれている。中国語ではこの種の焦点の位置は極めて安定しており、基本的に主節にある。日本語でも同じく、「から、ので、て」文では従属節に焦点が置かれることはなく、基本的に主節に焦点が置かれる。于(2000)では、「ので」の焦点の当て方について、『ノデ』文に焦点が置かれる場合、理由の従属節に表現の焦点を置かれることはなく、基本的には帰結として導き出

される主節に置かれることになる。例：頭が痛いので、[会社を休んだ。]（中略）もし、従属節に焦点を置きたければ、主節に『ノダ』を付けて、スコープを文全体に広げる必要がある。」と記述している。また、「から」の焦点の当て方についても、同様に述べている。

日本語の「有標焦点」の表現形式に関しては、5.2 で述べる。文中に焦点を表すマーカ―が使用されていない場合、焦点が主節にあることは両言語の共通点であり、因果関係を表す複文において、もっとも多い表現形式である。

## 5.2 「有標焦点」について

日本語では因果関係を表す複文の「有標焦点」の表現形式は3種類見られる。「有標焦点」は「のだ」と大きなかわりがあり、日本語の焦点の表現形式はそれほど複雑ではない。以下これらが中国語とどのように対応しているかについて検討する。使用記号は、P=原因・理由、Q=結果・帰結とする。

- a. 主節に「のだ」を付けたもの ⇒ P (から/ので/て), Q + のだ  
(5.2.1 参照)
- b. 従属節の「から」を「のだ」に後接して、「のだから」になるもの  
⇒ P+のだ(から), Q (5.2.2 参照)
- c. 構文の順序によるもの ⇒ Q+のは, P(から)だ (5.2.3 参照)

### 5.2.1 主節に「のだ」をつけたもの

主節に「のだ」を付けて、従属節に焦点が当たる場合は、「～から～のだ」「～ので～のだ」「～て～のだ」というような構文形式になっている。翻訳上、中国語との対応関係には明らかな傾向がある。訳文には訳者の主観的な要素も含まれていることは否めないが、主節に「のだ」を付けて、焦点が従属節に移される文は中国語に訳される場合、焦点を提示するマーカ―が使用される傾向が極めて強い。勿論例外もあるが、少数である。ただし、中国語では焦点の表現形式は日本語と異なり、語彙による焦点の提示手法がもっとも多く使用される。その形式は、主節に焦点のマーカ―が置かれるもの、従属節

に焦点のマーカ―が置かれるもの、従属節と主節ともに焦点のマーカ―が置かれるものの3つがある。

- (7) 「…これ友だちだから頼むのよ。…」 『吾』  
“…我们是朋友，所以才求你。…” 《我②》
- (8) 「…お前が承知しないもんだから、あいつはやけくそになったんだ」『青』  
“…你不答应他，他才豁出去了。” 《青》
- (9) 「あなたはここの冬を知らないからそう言うのよ」 『ノル』  
“你不知道这里的冬天才这样说。” 《挪》
- (10) 「うちへ寄っていただこうと思って、走って来たんですわ。」 『雪』  
“想请你到我家来坐坐，才跑过来的” 《雪①》

(7) (9)では、原文の主節の文末に「のよ」が用いられているが、実際に文中での働きは「のだ」と同様であり、「のよ」を「のです(よ)」に変えても差し支えない。日本語では文末に「のだ」を付ける場合、2種類の解釈が得られる。ひとつ目は従属節に焦点を当てる解釈であり、もうひとつは文全体が「のだ」のスコ―プに収められるという解釈である。たとえば、例(7)「これ友だちだから頼むのよ」では、〔これ友だちだから頼む〕という部分がスコ―プであるが、その中で〔これ友だちだから〕という部分が焦点になっている。

一方、訳文においては、いずれも焦点を提示する機能を持つ“才”が主節に使用されている。中国語では“才”<sup>(4)</sup>は焦点を表す表現として多く用いられており、因果関係を表す複文では、“才”は文に内在する原因・理由の論理関係を際立たせる役割を果たしている。(7)の主節の“求你”の理由はほかにも考えられるが、他の理由より“我们是朋友”がもっとも重要な理由になっている。(8) (9) (10)も同様に解釈できる。上例の原文と訳文の焦点のマーカ―はいずれも主節にあり、焦点の位置も一致している。

- (11) 「正直だから、どうしていいか分らないんだ」 『坊』  
“正因为正直，所以不知道该怎么办。” 《哥①》

- (12) 「貰うかも知れないから構わないんです」 『吾』  
 “正因为说不定娶不娶，所以没有关系，” 《我②》
- (13) 大方狭い田舎で退屈だから、暇潰しにやる仕事なんだらう。 『坊』  
 也许是在这狭小的乡下闷得慌，借吵架来消磨时光吧。 《哥②》

(11)(12)(13)は、原文の主節の文末に「んだ」「んです」「んだらう」を付けて焦点を際立たせているが、訳文の主節には、焦点を提示するマーカ―が置かれていない。中国語では語彙によって焦点を示す場合が多く、マーカ―の位置は固定されていない。(11)(12)訳文では、それぞれ従属節にある接続表現の“因为”の前に焦点を提示するマーカ―の“正”が置かれて、際立たせられた要素は唯一の理由だということが含意されるようになる。(13)の従属節には代表的な焦点のマーカ―の“是”を用いて、焦点を提示している。“是”の後ろに接続表現の“因为”が来るのが一般的な用法であるが、この文では、“因为”が省略されたと想定できる。この種の“是”は“正”と同様な働きを持つものであり、“是/正”を用いることによって、排他的な効果を生み出せる。これらの文の焦点マーカ―の位置は原文と一致していないが、焦点は一致している。

- (14) 「まあそんな最負があるから独仙もあれで立ち行くんだね。」 『吾』  
 噢，正因为有人捧场，独仙才混得下去啊！ 《我①》
- (15) 「ただ俺をこき使おうと思って、そら使ってやがるんだ」 『野』  
 “他就是为了逼我干活，才装病的。” 《野》
- (16) 西洋人がやらないから、自分もやらないのだらう。 『吾』  
 大概是因为西洋人不这么干，你才不肯的吧 《我①》
- (17) 「人に伝染すると思って、遠慮したんだらう」 『黒』  
 “可能是怕传染给别人，所以才回避的吧。” 《黒》
- (18) 只校長から、命令されて、形式的に頭を下げたのである。 『坊』  
只是因为校长有命令，才在形式上低下头来的。 《哥③》

(14)～(18)の原文は、文末に「んだ」「のだらう」「のである」などを付

けることによって、焦点が従属節に移されている。また、(16)(17)の文末に「の(ん)だろう」が用いられ、従属節が推量のプロオクスになっている。上例に対応している中国語訳文では、焦点のマーカーは複数になっており、従属節と主節ともに置かれている。訳文の主節には、いずれも焦点を提示するマーカーの“才”が使用されている。“才”を従属節の焦点を提示するマーカーの“正/就是/是/只是”と組み合わせて使用することによって、従属節と主節の論理関係が一層強くなり、際立たせられた要素が唯一の理由だということが含意されるようになっている。上例の訳文には(14)を除いて、もうひとつの注目すべき点がある。これらの文の訳文には、いずれも従属節に“是”、主節に“的”が置かれており、“是……的”という構文形式になっている。袁(2003)では「“是……的”構文形式は場合によって、広焦点(broad focus)を表すことができる。すなわち、“是……的”構文内に含まれた出来事がすべて焦点となる。(新田訳)」と述べている。さらに、「“是……的”構文の中で述べていることは、すべて新情報になっており、一種の「文焦点」である(新田訳)」とも述べられている。袁によると、(15)～(18)の焦点は広焦点であり、焦点の範囲がそれぞれ次のように拡大される。

他就是【(为了逼我干活), 才装病】的。	⇒ 就是 + P, 才 + Q + 的
大概是【(因为西洋人不这么干), 你才不肯】的吧。	⇒ 是 + G + P, 才 + Q + 的
可能是【(怕传染给别人), 所以才回避】的吧。”	⇒ 是 + P, G + 才 + Q + 的
只是【(因为校长有命令), 才在形式上低下头来】的。	⇒ 只是 + G + P, 才 + Q + 的
(□ は元来の焦点を示す) (【】 は拡大された焦点を示す) (G は中国語の接続表現を示す)	

ただし、このように複文の焦点の範囲を拡大すると、本稿で規定した焦点の定義と矛盾する点が生じてくる。袁は“是……的”という構文内の内容はすべて新情報だと言っているが、(15)～(18)の用例の内容によれば、主節の情報は新情報ではないことが分かる。袁ではこれを広焦点と呼んでいるが、このような文では、従属節と主節ともに“是……的”の構文範囲に入り、日本語の主節に「のだ」をつける文とまったく同様な効果を生み出せるので、これはむしろ文のスコープだと考えるべきである。つまり、“是……的”構文にも2つの解釈がありうる。ひとつは、焦点を従属節に当てるという解

積であり、もうひとつは、文全体が“是……的”構文のスコープに埋め込まれるという解釈である。たとえば、{他就是【[为了逼我干活]，才装病】的}では、【为了逼我干活，才装病】という部分がスコープであり、[为了逼我干活]という部分はその中のフォーカスである。したがって、上記のような“是……的”構文の焦点が拡大される場合、旧情報も含まれているので、広焦点と呼ばずに、スコープと言ったほうが、より適切であろう。“是……的”構文と日本語の「…のだ」文との類似性に関する先行研究も少なくないが、ここでは、触れないことにする。

### 5.2.2 「から」を従属節の「のだ」に後接して、「のだから」になるもの

日本語では、従属節の「のだ」も一種の焦点の提示方法である。野田(1997)は「従属節の『の(だ)』は従属節の一部をフォーカスにする機能を果たすもので、文末のスコープの『の(だ)』と同様に考えられる。」と述べている。しかし、この種類のものが中国語に訳された場合、「無標焦点」になっているものが極めて多い。また、「有標焦点」になっているものにも、語彙による焦点を表すマーカ―は観察されず、“是……的”という焦点を示す構文マーカ―が幾分か見られるだけであった。以下「無標焦点」の用例と「有標焦点」の用例をそれぞれ提示する。

- (19) 市街は一網打尽に焼かれたのだから遠景が見えた。 『黒』  
 广岛市的建筑，全部烧个精光，四周的远景，举目可望。 《黒》
- (20) おれは、別に耻ずかしい事をした覚えはないんだから、立ち上がりながら、部屋中一通り見巡わしてやった。 『坊』  
 我并不感到我做错了什么事，便站起身来向室内环视了一圈。 《哥③》
- (21) 「お客さまを送ってるんだから、私帰れないわ。」 『雪』  
 “我在送客人，我不能回去。” 《雪①》
- (22) 尤もこれは寐ている所を写生したのだから無理もないが、 『吾』  
 当然，他画的是我人睡方酣时的姿态，情有可原， 《我②》
- (23) 「…これはたしかに計って見たのだから間違はありません」 『吾』

“这是医生量过的，保证不会有错” 《我②》

(24) 「あれが十年前からの御箱なんだからおかしいよ。」 『吾』

“那是他从十年以前就用来吓唬人的，真可笑！” 《我②》

(19)～(21)の訳文では、焦点を表すマーカ―が用いられず、焦点は自然に主節に当てるようになっており、原文との焦点の対応関係がずれている。野田(1997)では従属節の「のだ」は文末スコープの「のだ」と同様な働きを持つと述べているが、これが中国語では、ほとんど反映されていない。つまり中国語訳文では、「のだ(から)」ではなく、「だ(から)」という意味でとらえるのが一般的である。その理由は、中国語のマーカ―の使用の自由度が高いことや訳者の表現意図と関係があると考えられるが、多くの訳文の用例を観察してみると、訳者の表現意図より、中国語の自然さを保つためと言ったほうがもっとも適切な解釈になっているように思われる。つまり、従属節の「のだ」は中国語の中で反映されにくく、対応性の低いものとなっている。これは前述した文末の「のだ」と中国語との対応関係とは明らかに違う。

一方、(22)～(24)の訳文では、それぞれ、“足……的”という焦点を提示するマーカ―が使用され、原文の「のだ」と対応している。しかし、今回収集した用例の中で、このような焦点を表すマーカ―を用いて、日本語と対応するものは非常に少なかった。従属節の「のだ」と中国語の対応関係については、今後さらに検討することが必要である。

### 5.2.3 構文の順序によるもの

日本語でも中国語でも、構文の順序を変え、焦点を際立たせる方法がある。この種の文の対応性はきわめて高く、日本語の「のは…からである」「のも…からである」に対して、中国語では“之所以…是因为”などの構文形式が多く用いられて、対応する傾向がある。ここでは、原因・理由を表す接続表現の“因为”などの前に置かれている焦点マーカ―の“足”がこの種の文の主な焦点マーカ―になっている。

(25) 死の病といわれたのも、貧しい山間部落では治療の方法がなかったからである。『越』

肺病之所以会被称作绝症，也是因为穷山村里根本没有治疗的办法。《越》

(26) 二人と一緒にダフネを出したのは、彼等の行先を無性に知りたくなかったからである。『挽』

之所以与他们一起走出“达夫妮”，是因为我非常非常想知道两人去哪里。

⇒《挽》

(27) この鏡ととくに云うのは主人のうちにはこれよりほかに鏡はないからである。『吾』

所以强调指出“那一面”，是因为主人家里除此之外再也没有第二面镜子。

⇒《我①》

「原因・理由⇒結果・帰結」という構文順序は因果関係を表す複文の一般的な構文順序であるが、強調効果を出すため、「結果・帰結⇒原因・理由」という順序に変える用例もよく見られる。構文順序を変えることによって、焦点が原因節に移動される。これも焦点を提示する一種の手法である。両言語ともに使われる表現形式で、対応関係の傾向が明らかになっている。

## 6. まとめ

以上、因果関係を表す複文における焦点の分類と表現形式について、対照しながら見てきた。焦点の分類に関しては、両言語にはそれぞれ「無標焦点」と「有標焦点」の2種類がある。「無標焦点」の場合は、文の情報が「旧→新」という順序になっているため、焦点が自然に主節に置かれるということが両言語の共通点だと言える。「有標焦点」の場合は、日本語には3種類の表現形式があり、焦点マーカーの位置は固定されており、構文形式により焦点を表しているのが特徴である。これに対する中国語表現では、焦点の表現形式は、語彙によるものが多く、焦点マーカーの位置もあまり固定されず、その数もひとつに限定されない。また、日本語の従属節の「のだ」により焦点を表す形式に対しては、中国語の自然さを失わないため、「のだ」の意味がほとん

ど反映されず、対応性は非常に低い。構文順序を変え、焦点を際立たせる場合は、両言語の対応性ももっとも高い。有標焦点の全体的な対応傾向をみると、中国語は日本語より焦点を表す形式が多く、焦点マーカ―の位置の自由度も高いということがわかる。これらをまとめると、下表のようになる。

「有標焦点」の対応関係

日本語			中国語		
焦点の表現形式	焦点の位置	焦点マーカ―の位置	焦点の表現形式	焦点の位置	焦点マーカ―の位置
P (から/ので/て)、Qのだ	従属節	主節	P、才Q	従属節	主節
			正/是GP、Q	従属節	従属節
			正/就是/是/只是GP、才Q (的)	従属節	従属節と主節
Pのだ (から)、Q	従属節	従属節	なし (無標)	主節	—
			是…的、Q P	従属節	従属節
Q、Pから	従属節	構文順序変換	GQ、是GP	従属節	従属節

注1: Gは中国語の接続表現を示す。

注2: Pは従属節 (原因・理由) を表し、Qは主節 (結果・帰結) を表す。

## 7. おわりに

本稿では主に日中両言語の因果関係を表す複文における焦点の表現形式について検討してきたが、研究対象範囲が限定されており、得られた結果もあくまでも、翻訳上でみられたものである。今後、他の研究方法も検討していきたい。また、今回見られた焦点の表現形式以外に、他の表現形式についても検証する必要がある。今後、因果関係を表す様々な表現を含む複文の用例を収集し、両言語の因果関係を表す複文における焦点の表現形式の異同等を一層極めていく所存である。

### 注

- (1) 焦点の定義については、Halliday (1967)、Rooth (1985)、田窪(1987)、野田 (1997)、徐 (2001)を参照した。
- (2) 焦点の分類に関しては主に徐烈炯 (2001)、盛(2005)を参照した。

- (3) 「自然焦点」を「情報焦点」と呼ぶ説も多くある。
- (4) 中国語では焦点を表すマーカーとして多く用いられている“オ”の機能に関する解釈については、主に井田(2003)、張(2000)を参照した。
- (5) 于(2000:PP. 190-193)では「ので/から」の焦点の当て方について論じられている。

#### 用例出典

『吾』 『吾輩は猫である』 夏目漱石 新潮社 2002(1905)

《我①》《我是猫》于雷译 吉林大学出版社 2000

《我②》《我是猫》刘振瀛译 上海译文出版社 1994

『山』 『山の音』 川端康成 岩波書店 1988

《山》 《山音》 叶渭渠、唐月梅译 中国社会科学出版社 1996

『挽』 『挽歌』 原田康子 新潮社 1961

《挽》 《挽歌》 林少华・张洁梅译 北京十月文艺出版社 2000

北京日本学研究中心「日中对訳コーパス」(2003)

『あした来る人』	『あ』	《情系明天》	《情》
『坊ちゃん』	『坊』	《哥儿》	《哥①》《哥②》《哥③》
『越前竹人形』	『越』	《越前竹偶》	《越》
『黒い雨』	『黒』	《黒雨》	《黒》
『野火』	『野』	《野火》	《野》
『青春の蹉跎』	『青』	《青春的蹉跎》	《青》
『雪国』	『雪』	《雪国》	《雪①》《雪②》《雪③》
『ノルウェイの森』	『ノル』	《挪威的森林》	《挪》
『斜陽』	『斜』	《斜阳》	《斜》
『布団』	『布』	《棉被》	《棉》

#### 参考文献

- 井田みずほ (2003) 「副詞“オ”の取り立て機能について——“就”との比較から」『中国語学』 月号 250
- 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」『日本語学』 5 明治書院
- 田野村忠温 (2002) 『日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』 和泉書院

- 沼田善子 (1989) 「とりたて詞とムード」『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 野田春美 (1997) 『「の(だ)」の機能』くろしお出版
- (1995a) 『「のだから」の特異性』『複文の研究(上)』くろしお出版
- 益岡隆志 (1997) 『複文』くろしお出版
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- 于 日平 (2000) 《现代日语中原因、理由、目的句相关性的研究》世界知識出版社
- 袁 毓林 (2003) 《从焦点理论看句尾“的”的句法语义功能》《中国语文》(1)
- 徐 烈炯 (2001) 《焦点的不同概念及其在汉语中的表现形式》《现代中国语研究》(3)
- 盛 文忠 (2005) 《汉日语句子焦点之比较》《中国語研究》47号 白帝社
- 张 谊生 (2000) 《现代汉语副词研究》上海学林出版社
- 白 梅丽 (1987) 《现代汉语中“就”和“才”的语义分析》《中国语文》第5期
- Halliday, Michael A. K. 1967. Notes on transitivity and theme in English, Part2.  
*Journal of Linguistics* 3, 199-244.
- Rooth, Mats. 1985. *Association With Focus*. PhD dissertation. University of Massachusetts. Amherst.

(にった さよこ)